



「岩手日報2023年12月25日付日報総研」  
「岩手日報社の許諾を得て転載しています」

# 物流24年問題 包装に活路

東北ウエノ（二関）



物流は経済の血液と言われる。血流が滞れば工場に原料や部品が届かず、店頭から商品が消え、暮らしそのものが立ちゆかなくなるといった。来々4月からトラック運転手らの時間外労働の上限規制が適用され、物流の停滞が懸念される。2024年問題が社会課題とならざるを得ない。この問題、とかく輸送の観点でのみ論じてはならない。処方せ

送包装容器の設計製造を手がける二関市地主町の東北ウエノ（鈴木雅彦代表取締役）が取り組みを語っている。実際には手がけた案件がある。同社が昨秋、ある国内メーカーから、輸送製品の破損率を下げたいと相談を持ちかけられた。半導体製造装置向けの部品が、空海や海運荷役で壊れるのだという。当然、利益率は下がる。返却して不要な輸送も生じて。世界的に半導体

不足が深刻化した時期でもあり、対策は急を要した。

海外の荷役は国内より作業が荒いとされ、30センチ程度の高さから落とされるリスクも考慮して梱包するのが一般的だ。だが東北ウエノはこの一般論から疑って掛かった。同社の持ち味の1つは徹底した現場主義。実態を精査する。30センチの高さから落とすのは60センチの高さから放り投げることもあるようだった。対してメーカーは、製品を段ボールで二重に梱包しただけの比較的簡易な状態で出荷していた。東北ウエノのテクニカルセンターで60センチの落下試験をすると、金属枠で固定され頑丈に見えた部品が、ぐにゃりと曲がった。輸送実態とかけ離れた梱包に原因があるのは明白だった。

東北ウエノのモットーは「専材運包」だ。公益社団法人日本包装技術協会（東包）が認定する包装専門家などの資格を持つ開発スタッフが、発泡樹脂やエポキシ樹脂材など多種多様な素材の中から最適なものを選ぶ。3Dスキャナなどの先端機器も駆使し、テストを繰り返して安全に運べる包装形状を開発する。

とは言え、とにかく嚴重に包めば良いのではない。開梱に手間取れば生産効率も落ちる。過剰な「オーバー・パッキング」では経費がかさみ、環境負荷も高まる。全体の最適化が求められる。くたんの部品に話を戻すと、同社は段ボールとワレタン緩衝材を組み合わせた包装を開発し、輸出するたびに起きていた破損をゼロにした。機材の大きさを別々に10種以上あった包装資材も3種に集約し、トータルで年間数億円規模の節減を導いた。破損返品もなくなり、物流への負荷も軽減された。このように製品の品質歩留まりを上げた例もあれば、使い捨ての梱包を樹脂製の薄い箱部距離を省くための工場で往來させ使い回すコンテナに改めた。収納力を高め一度に数倍の製品を運べるようにしたケースもある。トラックの輸送効率アップに直結し、運送業者も荷主にとっても都合が良い。輸送を含む生産コストが下がれば店頭価格に跳ね返る。結果的に消費者の利益となる。ECでもある。つまり、良いことずくめ。24年問題への解の1つが包装にあると述べたのは、この通りだ。



東北ウエノは既に大手自動車メーカー、半導体メーカーなど取り引きし、24年問題への危機感も背景に、新型コロナウイルス下でも飛び上りを10%程度伸ばしている。現在も全国から、毎月のように案件が寄せられている。ただ、本業に掘りかき企業として

ては、地場中小の動きの鈍さが気になる。この「言われるまま作り、出荷する」下請け体質ではもたない時代。中長期で続く縮小社会を生き抜くため、人も資源も最大限に活用しながらは

と鈴木代表取締役（70）。24年の到来を前に「包装を通じ、輸送という部分最適にもつらう、生産効率やコスト、環境面など持続可能な社会につながる全体最適を導きたい」と語っている。